勧進帳

猿楽山学校　5年学芸会　劇台本

1957・3・3・

於　自　猿　座

村人A　体何かね　近頃のあの安宅の関の見張りは。

村人B　あの取調べのげんじゅうなこと関所を通る人はいとおずかしくせっかんされるそうじゃ

村人C　ほんとうにいかめしい侍家がおおぜいで何のためにあのようなことをするんだろう　あのようすを見ただけでも全くく思い出しても身ぶるいがする程じゃ

歌(一)　きかせ　きかせ　さかんせこんな話を聞いてきた　早く話してみさつしゃれく　深い訳はいらないけれど梶原とやらむぎわらとかのへつらいでしに　さんざされて　鎌倉殿に告げそうかいそうかい　たぢなへえ……むぎわらとやらしおからとかの悪者のごおつくばりに判官様ともあろうお方が今はるろうの身となるとはほんにおかわいそうじゃ

村人D　ほんとうにおかわいそうではございませぬかきかせ〳〵きかんせ　おいらもこんなこと聞いてきた　早く話してみさつしゃれく　その梶原の犬併がおのれの出世の

全歌(二)

村人A　ふみ台に　判官様をのけものにしたそうかい　そいつは又ほんとうにおかわいそう　梶原なんどという奴は全く犬ちくしょう同然じゃ。わしも武士のはしれならば本当にひっとらえて首の根をへし折ってくちくにしぐらく〳〵にて食ってやりたいほどじゃ　ほんとうにうまかろう

全歌(三)　ほんとうにおいしかろう

村人B　判官様は大将の身で山伏姿に見をやつし忠義の侍四人連れて　そうかい所々方々にかくれいく義経殿も山伏もとは源氏の大将　あてなき旅をつずけるとはほんに浮世はままならぬものではございませぬか

全歌(四)　そよ吹く風もさぞ冷とうあたるでございましょう　日本国中　津々浦々まで判官様をめーとれとおふれがまわっておかわいそう　そうかいおふれがまわっておかわいそう

村人C　なるほどそれでなぞがとけましたな　近頃諸々方々に新関をたて山伏をとりしまる由きのうも三人安宅の関で打首となったそうじゃ　それが判官様でなければよいがいかに

村人D　むごい傷手ではございませぬか なあに 判官様は 武蔵坊弁慶 という強い強い侍を引連れおるとの事故 どえてどえて安宅の関の青侍に召しとられてなるものか 例え世がさかさまになろうともさような事はございませぬ 関弁なんぞやぼのやぼ きいでも あきれる程じゃ 全くあきれた 「あほう」 ではございませぬか

全　判官様は無念の涙 たよりの弁慶 したがえて花の安宅につくという そうかい 市無事のお通り祈ります こんな事をいうている間に山伏がきた 言いがかりをつけられては 大変ここえこぬうちに早く帰るとしようではございませぬか

歌　(五)

村人A　よかろう よかろう それでは急いで帰りましょう

全　(関所)

—◇花の安宅◇—
(山伏歌につれ 金剛杖をつきくん場)

幕内の歌
しのめ早く明け行けば
きいの宮居のかみがきや
あしの篠原 波こえて
花の安宅につきにけり

亀井　今更 弱音は禁物でございましょう
されば吾等の帯せるこの大刀は一体
何の為又何時の世に使用するご所
存か 君の一大事は今此の時

片岡(伊勢)　関所の番卒切りたおし
唯打破ってお通りなされい
あいや暫く 此の関を打破るは
易けれども

全　吾等が姿 かくれなし

弁慶　—◇吾等の姿◇—
なお行く先の そのうれい
やるせなき身の 心静かに
人目をさくる 関の山

義経　とにも角にも弁慶よきに計い給え

一同　各々不服はいうべからず

弁慶　はは お言葉ごもっともにござりまする
されど吾等面々こそは敵の山伏にも
見えまするが君のおん姿こそ、かく
れなくございまする怨れ多き事な
れども 御すずかけをぬがせられ
あの強力のおいたる笈をそっとおわ
せられみ笠深く召し給い くれぐ
れたる程にてなして吾々より後へ
引きさがりなば中の人は思いより
申すまじと 存じまする
さらば一時も早く出発の用意な致さん

義経　さらば一時も早く出発の用意な致さん

歌　—◇浮世のならい◇—(義経独唱)
"人目をしのぶ やるせなや
これも浮世のならわせか"
—◇罪なき身◇—
合唱
"罪なき身にて ありながら
人目をしのぶ やるせなや
いわおにひびく たきの音
よせいの無情 つぐるのみ"

弁慶　各々方 御心配めされるな 万事
この弁慶の胸に
片岡　赤き夕日も早一西山に傾き給う
日のとっぷりと暮ぬ内 急ぎ出発
致さん

第三幕　関所の場

幕内合唱
"あれ安宅も近ずきぬ
関の裏山 谷深く
人目の関も 遠ければ
うきよ一がらみ 経近—"

富樫　斯くいう某は 加賀の国の住人富樫
左エ門 さても頼朝 義経御中和
となりせ給うにより判官殿主従山伏

伊勢　なれぬ旅故 君にはさぞおつかれの
事と存じまする せいては事をしそ
んずるとはいにしえよりの定とつか
まつります
お休みあられて行く先々の
心したくをいたしては 如何なもの
にござりましょう

義経　(膝を下して)
弁慶　如何に弁慶!!
義経　はは 何用にござりまする
弁慶　ただ今 村人の話せし事を聞かれか
義経　いや 如何なることにござりまする
道々にも弁慶の申せし如く かく行く
先々に新関ありて山伏を固くとり
しらべる由 いわゆる「むこへは
思いもよらぬこと名も無き者に計
たれんよりはと覚悟はすでにきま
れども各々方の所存は如何に
言語道断 是はゆゆしき一大事
先ずは各々方の市心のほどを
如何に堅固な安宅の関と申せども
吾等が心中 神にも通ずること疑
うよちもございませぬ
しかし斯くも大勢の事なる故容易
に無事通過できるとは考えられま
せぬ 斯くなる上は是非に及ばぬ
人の通わぬ山深く分け入る以外は
ございませぬ

伊勢　如何に不思議な駿河殿のお言葉

となってむつの国へ下向の由
鎌倉殿 南にーめしてかく国々へ
新関をたて山伏を固く詮議せよとの
厳令によりて某此の関をあい守る
各々方様心えてよかろうぞ
仰せの如く吾々君の御前に控えおり
もし山伏とみるならば即座になわかけ
引きすえ申す
臣(A) いとたのもーき言葉なりなおも
富樫 山伏きたりなば計りごとにてほりな
となし鎌倉殿のお心を安んじ申す
べー 未だ日も暮れきらぬ折なれ
ばなおも表ばげんじゅうに手おち
無き様 弁うれよ
臣(A)(B) はは かしこかってございまする
如何に富樫殿あれへ大勢の山伏の
富樫 姿が立ちありわれてございまする
何々 山伏 山伏とあらば固くとめ
詮議致してよかろうぞ こなたと
臣(C) 申されよ
ーりや それなる山伏殿 おとどまり
弁慶 なされい これは安宅の関守にご
ざる
これは南都東大寺の建立の為に客僧
を連れて諸国を勧進致すもの
何と そ関所をお通し下されい
富樫 それはしゅしょうのお心掛けより な
がら近頃鎌倉殿よりの鍵(おきて)

山伏に身をやつす義経殿と疑いの
弁慶 あるものは細かく取調べよとの事
富樫 殊にこれなるは大勢の事なる故一人
もお通し申されぬ
心得ぬ事ともかな してそのわけは
征夷大将軍源頼朝(しょういたいしょうぐん)義経の仲 不和と
みなもとのよりとも
なりせ給いさきも申せし 如く判官
殿主従山伏となり、みちのくの秀衡
(ひでひら)を頼り下向ある由さこし
臣(D) めして、かく国々へ新関をもうけ
弁慶 某もーかとこの関守申し受けたり
しかるが故に一人もお通し申されぬ
いさいしょうち致せが 作り山伏
なればとも かくも、まことの山伏を
とどめよとの仰せはよもあるまい
臣(A) とやかくいう山伏は是非もなや
昨日も山伏を三人までも切りすてたり
弁慶 して又その切り落す首は義経殿か
臣(B) あ あらむずかしき問答 たとえ
まことの山伏とてようしやはならぬ
なおも無理に通うんとせば一命に
弁慶 もかかわる事
言語同断の事 しからば 気のむく
歌 ままにお取調べなされい
(山伏 じゅずをもむ)
「祈祷の歌」
がくまなのごんげん

おんまもり
不動明王(ふどうみょうおう) みそなわせ
吾等はまことの山伏よ
疑う者こそ おろかなれン
臣(C) こまごま取調べましたが不思議の
富樫 かど更々 ございませぬ
しからば先刻 南都東大寺の三ん
りゅうの勧進と仰せありしがそれな
弁慶 らば定めて勧進帳をお持ちの筈
富樫 そこにて読み上げ給え 某ここにて
聴聞(きょうぶん)仕まつらん
弁慶 何と――勧進帳を読めと仰せられるか
富樫 如何にも
弁慶 心得えてござる しからば
『それうらつら、おそんみれば大悲教主(だいひきょうしゅ)
の御ぬ月はねはんの雲にかくれ生死
なかうやの長き夢 おどろくべきもの
なし ここに人皇(にんのう)第四十五代
聖武天皇は深くぶつほうに志し給いて
南都に東大寺を三ん りゅうし給う
しかるにその大がらんも火災に逢い
焼亡(しょうぼう)し今にかえりみるもの
無きをうれえてこの後菜坊証源(さいぼうしょうげん)頼朝
命を受けて諸国を勧進す 一紙半銭
(いっしはんせん)にても、ほうざいの人は この
世にては無病息災(むびょうそくさい)家内安全(かないあんぜん)死して未来
は極楽浄土(ごくらくじょうど)の蓮花(れんか)の上にざする事
更々疑なし(さらさらうたがいなし)
富樫 帰命けい参(きみょうけいさん)
かどんなうなる必つつしみて申す
勧進帳聴聞の上は知いあるべから
ずさりながら平のついでに問い申
さん 世の仏徒(ぶと)の姿さまざま
まある中に山伏の姿いかめしく
して仏門(ぶつもん)修業(しゅぎょう)はふしぎなること
弁慶 これにもいわれありや いかに
おおその由ならばいとやすし
それは 修げんのこころざしという
階蔵金剛(かいぞうこんごう)の両部を骨
とし けんざん悪所をふみ開き
世にあくじゅうどくじゃをたいじして
現世愛民(げんせいあいみん)のいつくしみを
たれ あるいは なんぎょうくぎょうの
功をつみ あくれいぼうこんを成仏
(じょうぶつさせ) 日月晴明(じつげつせいめい) 天下泰平(てんかたいへい)
のきとうを修め内にはじひのとくを
富樫 修め表に剛魔(ごうま)のそうを降(ふく)
弁慶 あらわす これ神仏(しんぶつ)の両部
にして百八のじゅずに仏道のりを
あらわす
して又けさ、ころもを身にまとい
仏徒(ぶと)のなりにありながら、こうべ
にいただく「ときん」はいかに
すなわち、ときん すずかけは武士の

富樫　甲冑にも等しきもの腰にはみだのりけんを帯し手にはじゃかの金剛杖にて大地をついてふみ開き（こうざんぜつしょを）じゅうおうす

弁慶　しからば　金剛杖にて五体を固むるそのいわれは　なんと

富樫　さて　弟もおろかや　金剛杖はしゃくそんがくぎょうのとじょうに使われしものしてそれがしゅうげんに伝わりしはしゃくそんより代々さずけつがれし金剛杖　云わばわが祖先よりさずかりたる物を持ち山野（さんや）をぼうしょうし何のふしぎがあろう

弁慶　ぶつもんにありながら大力をたいせるそのわけは　これぞ　かかしの弓矢にたれども

富樫　よき人間にがいある者を一さつだにの利によってたちまち　切ってすてるなり

弁慶　しからば、これにまといし　はじきは、いかに

富樫　たいどう　黒色のはじきと申す

弁慶　いかにも　じゅんけつなるお心がけかかるとおとき客僧をしばし疑い申せしは「め」あって無きが如しわれは、いかにも無念（むねん）なり今より勧進のせしゅにつかん

臣　富樫（D）　ふせものただちに持ちまいれかしこまってございいまする

弁慶　わずかなれど東大寺ごんりゅうの勧進すなわち　ふせ物　ごじゅのう下さらば　某がくどくひとへに願いたてまつる

富樫　お心のほど、ありがとうございます

義経　いでいでで急ぎ出発致さん

富樫　待たれよ　それなるそばへ続く山伏おとどまりなされい　山伏沒の義経殿

義経　はっ！

富樫　何用でござるまちがいもなき義経殿　この富樫のひとみに誤り（あやまり）なしごかくごされよ

弁慶　いかに義経殿とおおせられるかいかなる事とは言えこの男あるがゆえにどこを通るにも義経殿とまちがわれ　とかくめいわくのかかる事よ　さわがしい世間のおりから

富樫　なんじの如きなまじ色白きはうるさい事でと、あれほど、とめたのを何でもかでも勧進に出るのだと聞かずけんじして、これまで来たり歩くとなればくたびれたと、はきくさる汝のためにはどれ程　やっかいな目にあう事で　はら立たしや

歌　人目の関のやるせなや
いかに人目をさくるとも
金剛杖にてうたんとは
神よ　てらせよ　わがまこと

弁慶　（二）まことの関は　通るかな
心ある身の　やからとて
うつ　杖先に　神やどる
まことの神よ、わが上に

富樫　早く通らぬ為が故　かようなちんじゅったいいたしたり　いざ立て

弁慶　出発じゃ　いざ　いかように陳ずるとも通す

富樫　事はまかりならぬ

弁慶　まだこの上にも疑あると申されるかかくなる上は　ぜひにおよばず
このごうりきめ　荷物もとうとも
おあずけ致す　しかしこれにて
うち殺して見せ申そう

富樫　いざ　いさぎよく　かくごをいたせ
あいや　暫く　早まり給うな　判官殿にもなき者をうたがいて　かくせっかんもしたものなり
今は疑は晴れたり　いつかな　ふしぎなふるまいあって　恐れ入って

山伏（全）　ござる　しからば急いでお通り
なされい
ありがとう　ございまする

歌　山伏の歌
人目の関のやるせなや
さとられぬるこそ　うきよなれ
これなる山水の　いわおにひびく
なるは　落ちくるたきの水

（全）　いとま申して去らばや　去らば
おいて　おっと　かたにかけ
とらの尾をふみ　どんじゃの口を
のがれ　のがれて　陸奥の国へ!!!

——完——